れもてゆくべきと思へば、さゝやかなる道ながら、式をたて法を定めて、人にもおしへものしたるを、いまはいとおもき事のやうに心得て、その道ゑらぬもの其室にいれば、かほあかめて一言も出し得ざるやうに、人の心にそみわたりしも、いと愚かなること、悲しび思ふ、さるに君は人にもかずまへられ給ふ身にて、わがごときものをたうとび、このみちのはかなきをもゑらで、いとおもきことゝ心得給ふ、心のひきくつたなさは、われもいといやしみ思へど、さすが流れくみ給ふえにしもあればかたりぬ、君いま心だかうて、其身のほどにゑたがひ、なすべきことをつとめ給はゞ、きみが手ならしつるうつはものよとて、千とせの後もつたへものすべし、これをわれより古をなすといふなり、いやしきわれらのもたるうつはものなどに、おほくのざえを盡してかいもとむるのはかなさにては、このさゝやかなる道とても、心にはいかで得給ふべきと、はたとにらむと思へば、ねぶりもさめにけりとぞ、

〔心の草紙〕茶たつる事は、いとたふとき道と心得て、客まねきつゝ、主人いかにもゑりがほに出でてもてなし、此かけ物は虛堂の墨跡、多くの黃金出だして買ひたり、この釜はあしやにて、何千貫の折紙こそあなれ、この茶わむはほり出しなれど、世に有るべしとも覺えず、殊に我は禪味ゑれば、名だたる宗匠もなどて及ばむ、ひさく斯く持ち、水斯く汲みて、斯く釜にいるゝに、松風の吹きたえて靜かなるごときは、心の妙とやいふべきと、心におもふ客もそれ〴〵の心に有りけり、

〔隨意錄三〕世有茶道者、予（○冢田虎）私願之、其爲道也、會親友於狹室、相歡一碗苦茶、而交歡心、物示素樸、以戒浮華、居不過容膝、食不及嗜味、清談閑語、以相樂餘暇、是其所以爲本意者與、而今世人以是爲一技藝而觀爲此技者、其會宴之室、供張之具、好設古奇、競陳珍異、則商賈乘之以貪贏利、蠻夷之器皿、僧侶之墨蹟、藏卑拙物、貴價以售之、而其好之者、徒得其價之貴以相夸焉、其賓主相會也、威儀曲節尤繁、妄褒美其器皿墨蹟、其要唯在相歡苦茶、而非敢交歡心、亦非敢有可聞之談語、甚則面相褒美焉、退而誹